玉鬘の筑紫流離 -「后がね」への道筋 -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2021-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯淺, 幸代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21903

玉鬘の筑紫流離

――「后がね」への道筋――

湯浅幸代

一　はじめに

『源氏物語』の登場人物の一人・玉鬘は、母である夕顔の死後、乳母一族に伴われ、筑紫へ下向する。この流離は、玉鬘が二十歳を迎えるまで、およそ十五年以上に及ぶ。

玉鬘の流離地として筑紫が選ばれた理由については、作者の夫である藤原宣孝が筑前守・大宰少弐を務めており、執筆に際し情報を得られた可能性があること[1]、また『紫式部集』に肥前へ下る友人との贈答歌があり、そのまま筑紫で亡くなった友人への鎮魂の意[2]などが指摘されている。

一方、物語内における筑紫流離の必然性としては、松浦佐用姫伝承に彩られる霊的・幻想的な文学風土の地を設定することにより、夕顔と玉鬘の位相（巫女性）を三輪山伝承と『肥前国風土記』の弟日姫子によって結びつける見解がある[3]。反対に夕顔と玉鬘との差異に注目すれば、外来文物の流入地である大宰府の先進性を玉鬘が身につけ、後の六条院世界で唐風文化を背景に演出される素地を作るとの意見がある[4]。

本稿でも、玉鬘の筑紫への流離は、玉鬘の人物造型、

ひいては物語の構造にとって必要な道筋であったと捉えたい。

玉鬘は、筑紫から上京してきた際、一時的に留まった九条の地において「あやしき市女、商人の中にいて」と語られる。また、玉鬘が六条院に迎えられる契機となる右近との再会場所は「椿市」であり、六条院入りの準備の際には、「市女などやうのもの」が玉鬘に仕える者たちの斡旋者として登場する。論者はかつて、このような玉鬘と「市」との関わりについて、臣下から立后した后たちの伝承――『延暦僧録』逸文の光明子の叙述[5]や、『文徳実録』の橘嘉智子の薨伝[6]などに見える「市」の意味同様、天皇と対等な形[7]で「市」を司ることのできる后としての資質、賢さの強調であることを指摘した[8]。つまり、後に玉鬘が任じられる「尚侍」（物語では后位にも匹敵する地位として描かれる[9]）となるべき資質を、玉鬘が備えていることを保証するための記述であるとした[10]。本稿で取り上げる玉鬘の筑紫流離についても、そのような玉鬘の運命を導く物語として描かれている可能性について検討する。

『源氏物語』の注釈書『河海抄』（四辻善成著、一三六二年頃成立）は、玉鬘に求婚する肥後の土豪・大夫監の歌の注釈をはじめ、玉鬘に関わる記述に神功皇后の伝承を引く。まずは物語の話型引用を辿りつつ、この神功皇后伝承と物語との関わりを精査しながら、最終的に玉鬘を「后がね」として、物語に浮上させる仕組みについて考えてみたい。

二　筑紫下向から肥前国へ
――『住吉』『竹取』引用の意味

玉鬘の筑紫行きについては、五条にいた夕顔が行方不明となり、玉鬘を西の京で養育していた乳母の夫が大宰少弐に任じられた後、次のように語られる。

母君の御行く方を知らむと、よろづの神仏に申して、夜昼泣き恋ひて、さるべき所どころを尋ねきこえけれど、つひにえ聞き出でず。さらばいかがはせむ、若君をだにこそは、御形見に見たてまつらめ、あやしき道に添へたてまつりて、遙かなるほどにおはせむことの悲しきこと、なほ父君にほのめかさむ、と思ひけれど、さるべきたよりもなきうちに、「母君のおはしけむ方も知らず、尋ね問ひたまはば、

いかが聞こえむ」「まだよくも見馴れたまはぬに、幼き人をとどめたてまつりたまはむも、うしろめたかるべし」「知りながら、はた、率て下りねとゆるしたまふべきにもあらず」など、おのがじし語らひあはせて、いとうつくしう、ただ今から気高くきよらなる御さまを、ことなるしつらひなき舟に乗せて漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむおぼえける。（新編日本古典文学全集『源氏物語』「玉鬘」八八・八九頁。以下『源氏物語』の引用は同書。表記は一部改めた）

乳母はまず必死で夕顔の行方を捜した。また昼夜を問わず泣いて主人を恋い慕う乳母の姿には、夕顔との強い絆が窺われ、その絆は「形見」として玉鬘へも引き継がれる。さらに自分たちの下向に玉鬘を同道させることについては、傍線部「あやしき道」[11]「遙かなるほど」のように、いったんは大臣の娘である高貴な姫君が経験すべき道行でないことが懸念される。しかし馴染みのない父方に幼い玉鬘を残していくことの不安などから、最終的に、乳母一族の話し合いによって玉鬘の下向が決定する。従ってこの流離は、一見、乳母側の都合によるところが大きいが、母・夕顔への深い想いと父方による継子虐め回避の意味が付されることより、[12]あくまで玉鬘の身の上を思いやった決断として語られる。ここに引き寄せられるのは、後に玉鬘自身も自らの身の上と比較する『住吉物語』の姫君の流離であり、『住吉』の姫君も、継子虐めから逃れるべく、故母君の乳母を頼り、父の邸宅から住吉へ移動する。玉鬘物語は、後に長谷観音へ参詣するなど、『住吉』との重なりが多く見られるが、[13]この物語には、最初から継子譚の話型が底流していることを確認しておきたい。[14]

一方、実際の道行は、『伊勢物語』の東下りを想起させる舟子どもの描写と相俟って、都を離れた悲しみを歌う在原業平歌や小野篁歌が踏まえられつつ、主として観念的に表現される。[15]

おもしろき所どころを見つつ、心若うおはせしものを、かかる道をも見せたてまつるものにもがな、おはせましかば、我らは下らざらまし、と京の方を思ひやらるるに、返る波もうらやましく心細きに、舟子どもの荒々しき声にて、「うら悲しくも遠く来にけるかな」とうたふを聞くままに、二人さし向かひて泣きけり。

舟人も誰を恋ふとか大島のうら悲しげに声の聞こゆる

来し方も行く方も知らぬ沖に出でてあはれいづくに君を恋ふらむ

鄙の別れに、おのがじし心をやりて言ひける。

金の岬過ぎて、「我は忘れず」など、世とともの言ぐさになりて、かしこに到り着きては、まいて、遥かなるほどを思ひやりて恋ひ泣きて、この君をかしづきものにて明かし暮らす。

（「玉鬘」八九・九〇頁）

傍線部のように「大島」（福岡県宗像市の大島か）や「金の岬」（福岡県宗像市鐘崎）といった具体的な地名も記述はされるが、道中そのものの描写は短く、この部分については、乳母一族の夕顔に対する思いの強さとそれに付随する望郷の念を描くことに重きが置かれる。ただ、「金の岬」については、「我は忘れず」（ここでは夕顔を思う意）の言葉とともに、万葉歌「ちはやぶる金の岬を過ぎぬとも我は忘れじ志賀の皇神」[16]（『万葉集』・一二三〇）が想起され、自然、この地に到ることで、万葉歌にも謡われる古代世界が物語に滲出してくることを予感させる。

しかし、乳母の夫が大宰少弐として過ごし、一行が筑前国で滞在した期間は、引き続き夕顔への思いで占められ、この後の記述も、たまさか夢に現れる夕顔の様子から亡くなったものと乳母に知られるばかりである。そのため、一族が大宰府の近くで五年あまりを過ごした後、玉鬘が二十歳になるまでの残り十年は、どのような経緯で肥前国に落ち着いたのかよくわからない。というのも、大宰少弐は、任期を終えた後、京へのぼるだけの十分な財力がなく、重病を得て亡くなり、子供たちも少弐と仲の良くなかった人たちの妨害を恐れ出立できないまま時を過ごすと語られるからである。

ただし、少弐は子供たちへ玉鬘上京のことを念入りに頼む遺言を残している。この遺言は乳母一族と夕顔との絆を改めて確認するものとなるが、この物語における遺言は、死者の魂を鎮めるべく必ず果たされなければならないものとして記述される特徴がある。[17] また乳母に暗示される夕顔の死も、玉鬘を明確に「継子譚」の主人公として位置づけることから、玉鬘の都への帰還は、この時点より既定路線として物語に定位されると見てよいだろう。

しかし玉鬘の流離には、さらなる話型が呼び込まれる。『竹取物語』に代表される求婚譚の話型である。[18]

……この君ねびととのひたまふままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。心ばせおほどかにあらまほしうものしたまふ。聞きついつつ、すいたる田舎人ども、心かけ消息がるいと多かり。ゆゆしくめざましくおぼゆれば、誰も誰も聞き入れず。

（「玉鬘」九二頁）

『竹取物語』の主人公・かぐや姫は、「天女」でありながら、「竹取の翁の娘」として、「聖」と「賤」との間をたゆたい、その美しさから多くの求婚者を惹きつけた。玉鬘の場合も、都の貴人でありながら、筑紫の田舎人たちの中に住み、多くの求婚者を得る者となる。両者はともに身分違いの「養い親」を持つが、かぐや姫に結婚を勧める竹取の翁とは異なり、玉鬘の結婚は、最初から乳母たちに受け入れられないものとして描かれる。その理由は、乳母一族が玉鬘の貴種性を認識しており、最終的には「都に戻るべき人」と理解されているからであろう。しかし『竹取物語』のような求婚譚によって引き寄せられるのは、このように「求婚者を拒否して本来あるべき場所へ帰還する」という道筋ばかりではない。

二十ばかりになりたまふままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし。この住む所は肥前国とぞいひける。そのわたりにもいささかよしある人は、まづこの少弐の孫のありさまを聞き伝へてなほ絶えずおとづれ来るも、いといみじう耳かしがましきまでなむ。

大夫監とて、肥後国に族ひろくて、かしこにつけてはおぼえあり、勢ひいかめしき兵ありけり。むくつけき心の中に、いささかすきたる心まじりて、容貌ある女を集めて見むと思ひける。この姫君を聞きつけて、「いみじきかたはありとも、我は見隠して持たらむ」といとねむごろに言ひかかるを、いとむくつけく思ひて、「いかで、かかることを聞かで、尼になりなむとす」と言はせたりければ、いよいよあやふがりて、おしてこの国に越え来ぬ。

（「玉鬘」九三・九四頁）

ここで語られる求婚者・大夫監のありよう[19]は、後に夕暮れ時にやってきたのに対し、「懸想人は夜に隠れたるをこそよばひとは言ひけれ、さま変へたる春の夕暮なり」と、『竹取物語』の語源譚を踏まえて語られており[20]、始めから失敗が予想される求婚者として描かれる。しかし国を越えて訪れるほどの勢力や傍線部「容貌ある女を集めて見む」といった大夫監の様相は、後に「わが君（玉鬘）をば、后の位におとしたてまつらじものをや」との発言に窺えるように、さながら「王」の風情である。後に上京した玉鬘の女房・三条が「大弐の御館の上の、清水の御寺観世音寺に参りたまひし勢ひは、帝の行幸にやは劣れる」と言い、同様の北の方の地位を玉鬘に望んだ発言が想起されよう。

つまり、ここでは、かぐや姫の最終的な求婚者、「帝」の位相が大夫監のものとなり、玉鬘に「后の位」がよそえられつつ、「都への帰還」を促す追い風となるのだ。ちなみに紫式部の伯父・為頼の歌集に次のような歌がある。

孫（むまご）の、女にて生まれたるを聞きて

后がねもししからずは良き国の若き受領の妻がねかも

（私家集大成『為頼集』四〇、三手文庫蔵、表記は私に改めた）

当時から、貴族の娘に期待されていたのは、後宮への出仕、及びその最たる結果としての「后の位」か、それが無理なら「上国以上の国司の妻」であったようだ。前者は女子を持った親の至上の夢であり、後者は、現実的で、比較的実現可能な希望となろう。しかし玉鬘の場合、『竹取物語』によって引き寄せられた「后の位」という位置づけは、地方豪族や国司の妻になる可能性を天秤にかけつつ、次第に物語の中で実現可能なものとして浮上してくることに注意したい。そのプロセスの一つとして、肥前国への移動がある。この点については、次章で具体的に検討することとしたい。

三　「松浦なる鏡の神」の背景
――神功皇后伝承との関わり

物語には、①玉鬘に求婚する大夫監の贈歌、および②乳母からの返歌が次のように記されている。

下りて行く際に、歌詠ままほしかりければ、やや久しう思ひめぐらして、

「①君にもし心たがはば松浦なる鏡の神をかけて誓はむ

この和歌は、仕うまつりたりとなむ思ひたまふる」と、うち笑みたるも、世づかずうひうひしや。我にもあらねば、返しすべくも思はねど、むすめどもに詠ますれど、「まろは、ましてものもおぼえず」とてゐたれば、いと久しきに思ひわづらひてうち思ひけるままに、

②年を経ていのる心のたがひなば鏡の神をつらしとや見む

とわななかし出でたるを、「までや、こはいかに仰せらるる」と、ゆくりかに寄り来たるけはひに、おびえて、おとど色もなくなりぬ。

（「玉鬘」九七・九八頁）

この贈答において詠われる「鏡の神」とは、肥前国松浦郡（現在の佐賀県唐津市）にある鏡神社の祭神である。現在は、神功皇后（一の宮）と藤原広嗣（二の宮）が祭られている。ただし、この祭神は松浦佐用姫であったという資料（『古今著聞集』五、松浦明神[21]）もあり、いつから現在の祭神になったか定かではない。『河海抄』では、この「鏡の神」の注釈として、神功皇后や広嗣の記事等を載せる。神功皇后の記事については、以下の通りである。

風土記曰昔者気長足姫尊在此山遙覧国形而勅祈云天神地祇為我助福便用御鏡安置此処其鏡即化為石見在山中因名曰鏡山

（玉上琢彌編『紫明抄河海抄』角川書店）

右記は、神功皇后（「気長足姫尊」）が山上で国見をした後、新羅征伐の戦勝を「天神地祇」に祈願すべく鏡を奉納し、その鏡がすぐに石化したことから鏡山と名付けられたという伝承である。以上の内容は、物語の地「肥前」ではなく『豊前国風土記』（逸文）の内容であり、いつからこの鏡の伝承が肥前国の伝承と混同されたかは不明である。現在の鏡神社（佐賀県）は、鏡山の山上にあり、神功皇后が戦勝祈願した山と伝えられているが、豊前国（大分県）の鏡山の山上にも鏡山神社があり、同

様の伝承を伝えている。ただし『万葉集』には、「松浦川に遊ぶ序」以下、娘たちの鮎釣りをテーマとした大伴旅人の歌を受けて、山上憶良が、松浦佐用姫や神功皇后の鮎釣り伝承を詠んだ歌が見られる。

（八六八）　松浦県佐用姫の子が領巾振りし山の名のみや聞きつつ居らむ

（八六九）　足姫神の尊の魚釣らすとみ立たしせりし石を誰見き

（『萬葉集全注』巻第五、有斐閣）

八六八番歌は、松浦佐用姫が出兵する恋人を見送るために山にのぼり領巾を振った伝承を、八六九番歌は、神功皇后が新羅征伐の成否を占うべく鮎釣りをしようと立った石（現在も垂綸石として残る）の伝承がうたわれている。これらの歌の前に旅人によって詠まれた娘たちの鮎釣りの風俗が、神功皇后の鮎釣り伝承に由来するものであることは明白である。また大夫監が歌う鏡の神（鏡神社祭神）は、神功皇后伝承の残る松浦川（皇后が鮎釣りした川）の近くにあることから、松浦の地における神功皇后伝承が、豊前国の鏡にまつわる伝承と混じり合った可能性は十分考えられる。

しかし、物語において、玉鬘への愛に心変わりのないことを神に誓う大夫監の歌と、再び都に玉鬘を連れて戻りたいとする乳母の歌とは、双方、愛情をテーマとしており、新羅から任那を守るために出兵する恋人・狭手彦[22]との別れを悲嘆し、無事の帰還（再会）を願いつつ亡くなる松浦佐用姫に祈ったとする方が内容としては自然である。

また大夫監のごとき「神に誓う歌」については、次のような例がある。

よひに女に逢ひて、「かならず後に逢はん」と誓言を立てさせて、朝につかはしける

ちはやぶる神ひきかけて誓ひてし言もゆゆしくあらがふなゆめ

（『後撰和歌集全釈』恋三・七八二・藤原滋幹）

右の歌では「再び逢うように」と誓いを立てさせられたのは女の側であるが、その約束を違えると神罰が下っ

て怖いので、決して約束を違えないように、と男が念押しをする。このように、神への誓言としたために、相手が約束を違え、罰を受けることを心配する歌としては、「忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな」（『拾遺和歌集』恋四・八七〇・右近）が有名であるが、逆に、大夫監のように、自分の心根の証明として神に誓う歌として、次のような赤染衛門の歌がある。

うたがふをくるしとおもへば玉かづらかみをかけてもちかふばかりぞ

（『赤染衛門集全釈』一六一、風間書房）

この歌は、詞書によれば、赤染衛門が、紫式部の従兄・藤原伊祐の妻が良い髪（かづら）を持っていると聞き、伊祐に髪を借りてくれるよう頼んだところ、その妻が赤染衛門との仲を疑っていると伊祐が言うので、自身の身の潔白を証明すべく詠んだ歌であるという。

ただし「神」と「髪」を掛ける言語遊戯的な姿勢や、神への誓言などは、本来不要な大仰さを感じさせ、赤染衛門としても、本気で疑いを晴らす、というよりは、おかしなことを言う妻だ、というぐらいに茶化して詠んだのではないだろうか。

この「伊祐の妻が良い髪を持っている」という情報は、赤染衛門の親しい友人である紫式部からの情報かもしれず、歌中にある「玉かづら」の言葉を踏まえても、玉髪物語の発想源との関わりが窺えて興味深い。大夫監の歌は、神への誓言まで持ち出す大仰さが鼻に付く歌であったものの、本人が得意気に思っていることから、「世づかずうひうひしや」（和歌の贈答に不慣れな初々しさ）と語り手に揶揄されたのであろう。

一方、乳母の返歌について考えるには、『紫式部集』に見える次の歌が参考になる。

筑紫に肥前といふ所より文おこせたるを、いとはるかなる所にて見けり。その返事に

①逢ひ見むと思ふ心は松浦なる鏡の神や空に見るらむ

返し、又の年もてきたり

②ゆきめぐり逢ふを松浦の鏡には誰をかけつつ祈るとか知る

（新編国歌大観『紫式部集』一八・一九、実践女子大学本、表記は私に改めた）

「松浦なる鏡の神」を詠む歌は、物語以前には見あたらず、紫式部が肥前国へ下る友人を持ち、このような贈答を交わしたことが、玉鬘物語の展開に大きく寄与したことが窺える。紫式部は、国司となった父の赴任先・越前国（「いとはるかなる所」）でこの友人の歌を受け取っており、その返歌として傍線部①の歌を詠む。歌意は「私があなたに逢いたいと思っている心は、そちらの鏡神社の神様も空からご覧になっていることでしょう（望みを叶えてくれますように）。」といった期待を込めた歌であるが、その返歌である友人の歌はいかがであろう。

友人の答歌については、「知る」の主語を「紫式部」とし、「ゆきめぐってあなたに逢うことを待つ私は、松浦の鏡神社の神様に、誰のことを心にかけてお祈りしているか知っていますか（他でもない、あなたですよ）。」と解釈するのが通説であるが[23]、主語を「鏡の神」とし、「ゆきめぐってあなたに逢うことを待つ私ですが、松浦の鏡神社の神様は、誰のことを心にかけてお祈りしているかご存じなのか。ご存じないのではないでしょうか。」とする注釈書もある[24]。そうなると、式部との再会を願いつつもそれが叶えられそうにない現実に対し、神を恨む内容となる。実際、この友人は筑紫で亡くなり、式部との再会は叶わなかった。物語における乳母の歌が、願いが叶わなければ「鏡の神をつらしとや見む」とあるのと通底する歌意となろう[25]。

また『紫式部集』に見える贈答は「逢ひ見む」また「ゆきめぐり逢ふ」ことを「まつ（松・待つ）」ことに主題があり、物語の贈答同様、願をかけている祭神は「松浦佐用姫」とした方がふさわしい。しかし、この玉鬘の物語は、やはり「松浦佐用姫」だけではなく、「神功皇后」をも視野に入れて語っているのではないか。『河海抄』が再び神功皇后の記事をもって注釈を施す[26]のは、次の本文である。

「神仏こそは、さるべき方にも導き知らせたてまつりたまはめ。近きほどに、八幡の宮と申すは、かしこにても参り祈り申したまひし松浦、筥崎同じ社なり。かの国を離れたまふとても、多くの願立て申したまひき。今都に帰りて、かくなむ御験を得てまかり上りたると、早く申したまへ」とて、八幡に詣でさせたてまつる。

（「玉鬘」一〇三頁）

後に、大夫監から逃げるように都へ上る玉鬘一行は、九条の地にいったん落ち着くが、その後、しばらく手だてのないまま月日を過ごした。乳母の不安が募る中、その息子・豊後介が解決策として提案したのが、石清水八幡宮への参詣である。しかも、その八幡宮が、筑紫の地で祈り続けてきた「松浦（鏡の神か）」や「筥崎」と「同じ社」と言うのである。八幡宮の祭神は、応神天皇を主神とし、神功皇后や比売大神（「玉依姫」「仲哀天皇」などの場合もある）など複雑な様相を見せるが、特に神功皇后は、応神とともに古くから八幡宮の重要な祭神であったことが指摘されている。[27] 現在も八幡宮である「筥崎」の他に、「松浦」もかつて八幡宮であったとするなら、既出の「松浦なる鏡の神」にも「神功皇后」を祭神として含んでいた可能性があるのではないか。また、別の社の神であったとしても、かの地で「神功皇后」に参詣していた可能性が考えられよう。物語本文には、大夫監の追手を退け「早舟」によって上京する玉鬘一行の様子が次のように記されている。

かく逃げぬるよし、おのづから言ひ出で伝へば、負けじ魂にて追ひ来なむと思ふに心もまどひて、早舟といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危きまで走り上りぬ。ひびきの灘もなだらかに過ぎぬ。「海賊の舟にやあらむ、小さき舟の飛ぶやうにて来る」など言ふ者あり。

（「玉鬘」一〇〇頁）

玉鬘一行の舟は、順風の助けもあって、危ういまでに速く都へ上ることができた。海の難所も無事通り過ぎた。ここで思い起こされるのは、住吉神の助けにより、やはり舟を思うように進めた神功皇后の伝承である。海路の無事については、平安時代にも、神功皇后を祭神とする香椎宮などに祈願が行われた記録が残されている。[28] 当時、皇后が航海の守護神として考えられていたことは間違いない。[29] つまり、玉鬘一行の船旅がすこぶる順調であったのは、豊後介の言葉に「多くの願立て申したまひき」とあったように、八幡神――主に神功皇后への祈願があったからだろう。玉鬘の筑紫への流離が、紫式部の友人のように、かの地で終わることがなかったのは、松浦佐用姫だけでなく、この八幡宮（神功皇后）への祈願があったからではないか。

このように、肥前国において、大夫監から求婚される

ことを契機に浮上した玉鬘の「后がね」の可能性は、神功皇后伝承の後押しを受け、さらに九条の地や「椿市」など、史上の后たちの伝承同様、「市」との関わりを経て、現実的には冷泉帝の尚侍という形で実現するのである。

四　結語

玉鬘が滞在した筑紫――主として肥前国は、紫式部の親しい友人の下向先であり、『万葉集』や『風土記』に見える古代伝承を含み込む土地であった。玉鬘物語は、『住吉』や『竹取』といった先行作品の話型に導かれながら、「后位」への可能性を仄めかしつつ、最終的には、神功皇后伝承と、「市」との関わりを経て、新たな「后がね」として玉鬘を六条院に迎え取る。後に玉鬘が得ることとなる尚侍の地位が、住吉神を神下ろしする神功皇后同様に巫女性を帯びることは、諸氏により指摘されているが[30]、玉鬘が冷泉帝の「尚侍」（物語では后位に匹敵する地位）として物語にある意味は、光源氏の王権更新の可能性[31]を秘めつつ断念させる意味を持つ。

ここに同じく神功皇后のありようを踏まえるならば、『住吉大社神代記』にある住吉神と皇后との密通譚を、神に擬せられた光源氏と玉鬘が成し遂げる可能性すら浮上する[32]。住吉神との関わりは、主として直接祈りを捧げた明石一族との関連で論じられることが多いが、六条院のもう一人の「后がね」である玉鬘にも、関連づけて語られていると考えてよいのではないか。

しかし、そのような玉鬘と王権との関わりは、実父・内大臣の承諾を得た髭黒大将に玉鬘が強引に奪われることによって阻止され、玉鬘は図らずも継子譚の流離から逃れられない運命を生きた[33]。後に、子沢山の母として、髭黒大臣家を切り盛りする玉鬘の「家刀自」としてのありようは、帝と並び立つことのできるような「后」の資質を持ち合わせていた名残でもあろう。

この玉鬘像の背後に透かし見える「后」たちのありようの一つとして、「神功皇后」をもおさえておいてよいのではなかろうか。

《注》

1　岡一男「『源氏物語』の世界・素材・体験」（『源氏物語の基礎的研究』東京堂、一九五四年）

2 三谷邦明「玉鬘十帖の方法――玉鬘の流離あるいは叙述と人物造型の構造」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年）初出一九七九年

3 秋澤亙「松浦なる玉鬘――その舞台設定の意義をめぐって」（『源氏物語の准拠と諸相』おうふう、二〇〇八年）初出一九九六年、『肥前国風土記』の弟日姫子については、注22参照。

4 塚原明弘「唐の紙・大津・瑠璃姫考」（『論叢源氏物語2 歴史との往還』新典社、二〇〇〇年）

5 「皇后、室に在りて父に諮り、市に入りて諸の買人に称尺を用ふことを教ふ。時に日本いまだ称尺を行はず。新たに大唐より称尺を得たり。所以に皇后市に入り人に称尺を用ふことを教ふ。」（『日本高僧伝要文抄』所引『延暦僧録』「天平仁政皇后菩薩伝」国史大系参照）

6 「嵯峨太上天皇、初め親王為るに后を納れ、寵遇、日に隆んなり。天皇、祚に登り、弘仁の始、拝して夫人と為す。是より先数日、后夢に針孔より出で、左市の中に立つ。六年秋七月七日、后亦夢に仏の瓔珞を着す。居ること五六日、立ちて皇后と為る。」（『日本文徳天皇実録』嘉祥三年（八五〇）五月五日条　国史大系参照）

7 『周礼』天官冢宰下・内宰条の記述に「凡建レ国、佐レ后立レ市。設二其次一置二其叙一、正二其肆一陳二其貨賄一、出二其度量淳制一、祭レ之以二陰礼一。」とあり、その文章に対し、鄭玄は「王は朝を建て、后は市を立つ。陰陽相成の義なり。」と注を付しており、后が王の朝政に対し、市を司る役割を持ち、それらが陰陽の関係にあると述べている。光明子の伝承については、これらが典拠と見られており、光明子の后のあり方については、立后宣命に見られる「後（しりへ）の政」、「並坐」の語が、王権内の相互補完、分掌を示す表現であることが荒木敏夫氏（『日本古代王権の研究』吉川弘文館、二〇〇六年）により指摘されている。

8 湯浅幸代「玉鬘の尚侍就任――「市と后」をめぐる表現から――」（『むらさき』四五輯、二〇〇八年十二月）

9 注8の論文で、玉鬘の尚侍の地位は、先行物語である『うつほ物語』の俊蔭の娘（物語の帝に「よし、行く末までも私の后に思はむかし。」と言われ、人妻ながらも尚侍に任じられる）同様、「私の后」に匹敵するものと述べた。ちなみに朱雀帝の寵妃・朧月夜も尚侍として描かれる。

10 注8に同じ。

11 「あやしきみ（身）」とする写本もある。

12 日向一雅「玉鬘物語の流離譚の構造」（『源氏物語の準拠と話型』至文堂、一九九九年）初出一九九三年

13 藤村潔「継子物語としての玉鬘物語」（『古代物語研究序説』笠間書院、一九七七年）等。久下裕利「継子譚」（『物語の廻廊――『源氏物語』からの挑発』新典社、二〇〇〇年）に整理がある。

14 注12に同じ。

15 本文中にある「返る波もうらやましく」は、「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな」（『伊勢物語』七段・『後撰和歌集』羇旅・一三五二・在

原業平）を、「鄙の別れに」は、「思ひきや鄙の別れにおとろへて海人の縄たき漁りせむとは」（『古今和歌集』雑下・九六一・小野篁）が踏まえられた表現。

16 「志賀の皇神」は、福岡市志賀島の「志加海神社三座（並名神大）」（『延喜式』巻十）を指し、航海の際は、その加護を得るべく祈願が行われたはずである。

17 日向一雅「怨みと鎮魂――源氏物語への一視点」（『源氏物語の主題――「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社、一九八三年）

18 秋山虔・後藤祥子・三田村雅子・河添房江「共同討議・玉鬘十帖を読む」（『国文学』三二――一三、一九八七年十一月）等。

19 大夫監の造型については、『住吉』の主計頭のほか、高橋和夫「源氏物語玉鬘巻と北九州」（『源氏物語の主題と構想』桜楓社、一九六六年）で、肥後の土豪・菊池氏の面影が指摘されている。また安藤徹「玉鬘と筑紫（うわさ）圏」（『源氏物語と物語社会』森話社、二〇〇六年）の注18に『竹取物語』引用の視点から、大夫監を「筑紫の帝」に位置づける見方が示されている。

20 『竹取物語』では、多くの求婚者が昼夜構わずかぐや姫の元にやってくることに対し、このような「夜這い」によって、「よばひ」が求婚する意を持つようになったと偽の語源譚を語る。

21 『古今著聞集』では、佐用姫の領巾振り伝承を記した後、この領巾を振った山について「此山は肥前国にあり。松浦明神とていまにおはしますは、かのさよ姫のなれるといひつたへたり。」（古典文学大系『古今著聞集』岩波書店）と記す。

22 大伴狭手彦。『日本書紀』宣化天皇二年十月条に「天皇以新羅寇於任那。詔大伴金村大連。遣其子磐與狭手彦以助任那。――中略――狭手彦往鎮任那。加救百済。」（国史大系）とある。また『肥前国風土記』（松浦の郡）にも、狭手彦の記述が見えるが、恋人は佐用姫ではなく「弟日姫子」とする。この『風土記』の狭手彦は、出兵の際、恋人に鏡を渡すが、その後、弟日姫子の元に狭手彦に似た男が通い、後にその正体が蛇とわかって、女が死ぬ、という三輪山伝承に酷似した展開を持つ。

23 南波浩『紫式部集全注釈』（笠間書院、一九八三年）等。南波氏は後出（注24）木船氏の「鏡神社の神」主語説を紹介しながらも、問題点もあるとして、「紫式部」主語説で解釈する。

24 木船重昭「『紫式部集』の解釈研究（二）」（中京大学『文学部紀要』十五巻二号、一九八〇年十一月、後に『紫式部集の解釈と論考』に所収）に、「鏡神社の神」主語説を提示し、物語の乳母の歌とも相通じることを指摘する。他、同主語説に笹川博司『紫式部集全釈』（風間書房、二〇一四年）がある。

25 注24木船論文

26 久保田収「中世における神功皇后観」（『神道史の研究遺芳編』皇學館大学出版部、二〇〇六年、初出一九七二年）に、蒙古襲来以降、再び、神功皇后への注目が集まったことが指摘されており、『河海抄』にもそのよう

な中世の注釈書としての神功皇后観があるとは思うものの、論者（湯浅）は、物語自体に、そのような解釈を要請する文脈があると考える。

27 西宮一民「御祭神としての神功皇后」（神功皇后論文集刊行会編『神功皇后』皇學館大学出版部、一九七二年）

28 飯田瑞穂「上代における神功皇后観」（『飯田瑞穂著作集5　日本古代史叢説』吉川弘文館、二〇〇一年）初出一九七二年

29 注28に同じ。

30 たとえば河添房江「朱雀皇権の〈巫女〉朧月夜」（『源氏物語表現史』翰林書房、一九九八年、初出一九九三年）では、尚侍が神器を奉祭する内侍所の長官であることから、実質はキサキの一人であっても、なお〈巫女〉集団の頭としての象徴的な役割をはたしていたと述べる。

31 日向一雅「光源氏の王権と「家」」（『源氏物語の準拠と話型』至文堂、一九九九年）

32 深澤三千男「紫式部の皇室秘史幻想への幻想――皇祖神疑惑、神功皇后密通伝承をめぐって、后妃密通物語発想源考」（神戸商科大学『人文論集』二八―二、一九九三年二月）

33 注12に同じ。